

## 教材「やまなし」実践における学習課題の検討

常 木 正 則

### 1 問題及び問題論究の経緯

教材「やまなし」の学習指導で提示された学習課題「谷川はどのぐらいの深さか」は適切か。これが問題である。

この学習課題は第4回日本教育技術学会（1990.10.21）で実施された3人の授業者による「研究的立ち会い授業」の内、野口芳宏の授業で提示された。私はその時初めてこの学習課題を知った。それ以来、この学習課題は適切であるのかという問題意識を抱いていたが、結論を出さないうままだった。その後、浅野秀之の「やまなし」実践（1994.3実施、新潟市立笠木小学校教諭）でこの学習課題が課せられていることを知った。現在、浅野実践の研究を進めていることから<sup>(注)</sup>、この問題を避けて通ることができない状況に至った。そこで、まずは野口実践における学習課題「谷川はどのぐらいの深さか」の論究を行った。

### 2 野口実践の概要と研究討論で言及されたこと

#### (1) 実践の概要

野口実践及び研究討論の逐語的記録が日本教育技術学会編『教育技術研究 No.4』（1992 明治図書）に載っている。これに依拠して、野口実践及びその実践をめぐる研究討論の概要をまずは紹介する。学習者は岩手大学教育学部附属小学校6年生楓組である。野口の学習指導を受ける前に、教材の音読が課せられた。どの程度の読み（黙読も含めて）がなされたのかは不明。授業時間は30分であった。

野口がこの授業で最初に課した学習課題が「この谷川は、どのぐらいの深さだと思うかをノートに書く」である。その後の指導・学習活動の展開の概要は次のとおりである。

#### ① 指導者の用意した解の範囲により解の分布を調べる。

- |            |     |
|------------|-----|
| A 30センチ以内  | 1人  |
| B 60センチ以内  | 16人 |
| C 100センチ以内 | 11人 |
| D 100センチ以上 | 10人 |

② 「明らかに誤りというのがこの中にある」として、その一つを選ばせる。

- A (人数不明)
- B (人数不明)
- C 4人
- D 9人

③ Dであるとした9人に証拠をあげて理由を述べさせる。

理由としてあがってきたのは以下のとおり。

・「小さな谷川の底」って書いてあるから、だからそんな1メートルも深い川があるというのはちょっとおかしいと思う。

・カワセミが後で来るから、深くそんなに潜れないと思うから、Dは違うと思います。(野口はこの解について、その正否を問い、否とする反論を求め、間違いであるとした。)

・もし谷底が深かったんなら、兄さんのカニはあんまりその黒く尖っているものを見るのがあんまり出来ないと思うし、もし川が浅かったんなら、兄さんのカニは、その黒く尖っているものをすぐく見ることが出来たと思います。(この解に対して、「小さな谷底だから、水がきれいだと思って、透き通っていると思って、だから、それぐらい見えるんじゃないかと思って。」という反論がされている。)

④ 「決定的にわからせる言葉があるけど、だれも見つけてないな」と言って、以下の2か所の叙述を紹介する。

「つぶつぶあわが流れていきます。かにの子供らも、ぼつぼつぼつと、続けて五、六つぶあわをはきました。それは、ゆれながら水銀のように光って、ななめに上の方へ上っていきました。」

それから、「かばの花が流れてきた。『ごらん、きれいだろう。』あわといっしょに、白いかばの花びらが、天じょうをたくさんすべっていきました。」こういうことですね。小さなアワも見える。

⑤ カニの甲羅の大きさ(直径)をノートに書かせ、指導者の用意した解の範囲により解の分布を調べる。

- 3センチ以下 4人
- 6センチ以下 (人数不明)
- 6センチ以上 (人数不明)

⑥ 野口の解を示す。

カニは小指の爪ぐらいであること、深さは20センチぐらいであることを説明した後、「その底で小さなカニが、2匹ね、お話してるんですよ。月の光が青白く差してくる、その底で。そういうね、かわいらしいイメージで読まなきゃ、ダメなんだよなあー。」と述べている。

## (2) 研究討論で言及されたこと

3人の授業が終わった後、約1時間の研究討論が行われた。その中で、当該の学習課題に関連した発言を問題別に抽出する。

### ① 深さについての野口見解に対する疑問

参会者・下重の質問「やまなしが落っこってくる時に、底までは着いてないんですけども、20センチという深さではやまなしが底に落っこってしまうんじゃないか」

野口の回答「やまなしが落っこってくる、この表現と矛盾しないんじゃないでしょうかね。」

司会の斉藤「しかし、野口先生のほうも20センチって、こうおっしゃっているわけで、そういう物理的発想でこれを見ていいかという問題もあるんでしょ。」に促されて、下重「はい。そういうふうに詰められると困るんですけども、イメージですから、自由というのもありますけども、限定してしまうのはちょっとへんだなあ、というふうな考えもあります。」

### ② 20センチとする野口の根拠

「そこからこう粒が上がってってそのアワが、川の表面を流れていくのが見えるわけですよ。」

「やっぱり子どもが、私が二つの表現を読んで、これはせいぜいこれくらいだと、20センチくらいだと。」

### ③ この学習課題の意義についての野口見解と参会者の見解

#### ア 野口見解

「子どものイメージの狂いというか、まあ狂いなんて言うともた怒る人がいるでしょうけども、それを直してやるほうが鮮明な効果になると」「ですから、とにかく、私は30センチより深いこのBもCもDも、そういうイメージで読んでいたんじゃない、カニがこんなにデカくなっちゃうし、そうするとクラムボンなんてのはバケモノみたいになっちゃうわけです。そういうイメージでこの本は読むべきではないという所に気付かせたかったわけです。」

「記号に対する正しい意味の解釈を訓練していくというのが私の国語学力論です。『叙述に即して適切なイメージを描く』という学力を形成したと、こういうことです。」

「普通気付かないんだけど、相互の間には考え方の違いがずいぶんあるものだということを顕在化してみたい。例えば、『川の深さは？』というと、あれ問われたからこうやって違いが出てくるわけですね。問われなきゃ、だれもそんなこと考えないと思います。ついでにカニの大きさも。そして妥当なイメージというのは何かということ、表現を根拠にして考えさせていくというのは、まさに思考力の発揮だと、こういうふうに思います。」

#### イ 参会者・清川の見解

「野口先生の場合は、あらためて文章を精緻に読ませると。もう一度文章をていねいに読ませるのに有効な問いを見つけられたと。」

### 3 学習課題「谷川はどれぐらいの深さか」の適切性の検討

学習課題「谷川の深さはどれぐらいか」の適切性を判断する観点を二つ設定する。一つは、それが分かってどうなるかということ。もう一つは、それが分かる学習過程で何が行われ、その学習活動をどう評価するかである。

#### (1) 分かってどうなるか

まず、野口の見解はどうか。実践及び研究討論の概要から要約的にまとめて見ると、学習者が描いている谷川の深さのイメージが妥当なものとなる。

本授業前の読みにおいて、学習者は谷川の深さについてどのようなイメージ・認識を持ったのであろうか。これは分からないことである。以下に述べることは、筆者の読みの実際に依拠した推測である。

学習者には谷川の深さの物理的（何センチくらいととらえること）なイメージ・認識はなかったと思われる。あったとしてもそれは非常に漠然としたものであっただろう。私の読みにおいては「谷川はどのぐらいの深さか」という問題意識はなかった。野口が「問われなきゃ、だれもそんなこと考えないと思います」と言うとおりでである。野口は「顕在化してみたい」と言っているが、深さの問題意識も無くそのイメージは極めて漠然としたものであっただろう。

野口は授業で、かにの大きさは小指の爪ぐらいであること、深さは20センチぐらいであることを学習者に説明した後、「その底で小さなカニが、2匹ね、お話ししてるんですよ。月の光が青白く差してくる、その底で。そういうね、かわいらしいイメージで読まなきゃ、ダメなんだよなあ。」と語っている。また、研究討論で「ですから、とにかく、私は30センチより深いこのBもCもDも、そういうイメージで読んでいたんじゃ、カニがこんなにデカくなっちゃうし、そうするとクラムボンなんてのはバケモノみたいになっちゃうわけです。そういうイメージでこの本は読むべきではないという所に気付かせたかったわけです」と述べている。

果たして、学習者はそのようなイメージを描いていたのであろうか。確かめる術もないのであるが、恐らくそういう学習者は極めて稀であったと思う。谷川の深さの物理的なイメージは無いが、「小さな谷川の底」の理解は大旨妥当な理解があったのではないか。それは、学習者の応答「『小さな谷川の底』って書いてあるから、だからそんな1メートルも深い川があるというのはちょっとおかしいと思う。」から伺える。「小さな谷川の底」の理解ばかりでなく、「かにの子供ら」などの理解に基づいて、出来事、情景のイメージを描いていたのではなかろうか。そのイメージは野口が想定したようなイメージにはならないと推測する。場面を絵に描かせて見れば、この推測の確からしさを確かめることができよう。

作品の舞台である小さな谷川の深さがどれぐらいであることを理解させた。しかし、それはこの作品の理解内容として不可欠なものではない。谷川の深さが分かることの必要性がないというこ

とである。それを理解したからといって作品がよりよく理解されるわけでもない。必要性のない指導・学習活動が行われたということになる。

なぜ必要でないのか。その理由を作品「やまなし」の理解に即して述べる。野口も言っているようにこの作品を読み進める過程で、「谷川はどのぐらいの深さか」の理解を迫られることはない。作品「やまなし」では、その冒頭に「小さな谷川の底を写した、二枚の青いげん灯です。」とあり、どこを写しているか場所を読み手に伝える。この時、読み手の小さな谷川についての経験の有無、豊かさの度合い、興味関心によって異なるであろうが、「谷川はどのぐらいの深さか」に思いを馳せる読者は稀有であろう。次に、叙述は「一 五月」とあって「二ひきのかにの子供らが、青白い水の底で話していました。」へと展開する。ここで、読み手は五月の谷川の水の中、底に導かれる。この時、読み手の谷川の深さについての意識・認識はどうか。非常に漠然としたものであろう。そして、この意識・認識はこの後の叙述を読み進めても変わらないであろう。なぜか。この作品は水の中、底を舞台にした出来事、情景が描かれていて、読み手は出来事、情景の理解に意識が向き、深さはどれくらいなのかを意識することはまずないからである。漠然とした空間（深さ）を意識して読み進めているのである。

そういう作品の理解が進められているところに、深さを理解させイメージを明らかにさせることは、斉藤の言う「物理的発想でこれを見ていいかという問題」が生じる。「やまなし」の世界は空想の世界である。空想の世界に現実の世界の認識を持ち込むことは空想の世界をこわす。読み手のそれぞれが叙述に即してイメージを描き、空想の世界を楽しめばよいのである。下重の発言「限定してしまうのはちょっとへんだなあ、というふうな考えもあります」は、氏自身の読みの実際からの問題意識であったと思われる。

五月・十二月の場面をいくつかの絵に表すことが課せられた場合でも、描く紙の大きさの制約の中で、思い思いの水底、水面の線を描くであろう。理解しイメージすべきことは、水中、底を舞台とする出来事、情景である。

谷川の深さが20センチくらいであることを知り、20センチくらいの深さを想定して読もうとするとどうなるか。窮屈な制約を課せられる思いがし、20センチくらいの深さを想定して読むことに苦痛を感じる。どうしてであろうか。それは、すでに述べたように作品の叙述が読み手に谷川の深さを意識し認識することを求めているからである。物理的な深さなど意識しないで読めばよいところに、20センチくらいの空間（深さ）を意識して読もうとするから窮屈な感じになり、また苦痛にも感じるのである。

学習課題「谷川はどのぐらいの深さか」の答えは、一人の学習者を除いて野口が想定していた深さとは異なるものであった。このことをどう考えるか。この学習課題は深さについての問題意識が無かったであろう状態にあって突然課せられた。そこで学習者は作品の言葉「小さな谷川」などの理解と谷川の経験（見たり、そこで遊んだりしたこと）から思い思いに物理的深さを想定して応答しただけである。深さの物理的な認識は必要のないことなのである。野口が言う「イメージの狂い」など問題にする必要もなかったのである。

## (2) 分かる学習過程で何が行われたか、それをどう評価するか

野口見解をまとめると次のようになる。

この学習課題を課すことにより、記号に対する正しい意味の解釈活動が行われた。叙述に即して適切なイメージを描く活動が行われた。

野口は、国語の学力を「記号に対する正しい意味の解釈力。叙述に即して適切なイメージを描く力」（発言をその趣旨を変えることのないよう留意して談話体から文章体に変えて引用した。）ととらえている。この学習課題は、この学力の形成に沿うものであるとしている。「叙述に即して適切なイメージを描く」ことでは、学習者の谷川の深さ、かのにの大きさのイメージが妥当でないとの理解があった。そこで、この学習課題を課すことで学習者のイメージを顕在化し、妥当なイメージを表現を根拠にして描かせようとした。

分かる必要のない学習活動をさせているのであるから、その学習活動は当然評価できない。この学習課題を提示して、学習者に「記号に対する正しい解釈」活動をさせることはできた。また、「叙述に即して適切なイメージを描く」活動をさせることもできた。しかし、その解釈内容、イメージの内容は作品「やまなし」の理解に寄与するものではなかった。それはただ、解釈のための活動、イメージを描くための活動である。

参会者の一人が「野口先生の場合は、あらためて文章を精緻に読ませると。もう一度文章をていねいに読ませるのに有効な問いを見つけられたと。」と述べ、この学習課題を肯定的に評価している。これは、精緻に丁寧に読むことにより理解したことが、作品の理解にどのように寄与したのかの観点を欠いた評価である。野口はもちろんこの発言者も、学習課題は何であれ精緻に丁寧に読む活動がなされればよいと考えていたわけではないであろう。しかし、実際はそのような性格の学習課題となっているのである。

## (3) まとめ

この学習課題は適切ではない。学習課題「谷川はどのぐらいの深さか」による「記号に対する正しい意味の解釈」学習活動、「叙述に即して適切なイメージを描く」学習活動は、「問われなければ、だれも考えない」特殊な問題の解を求めての学習活動である。その学習活動により、より適切な作品理解をもたらすことがないからである。

## (注)

浅野実践の研究は一応のまとめをつけ、小冊子『実践者と研究者の研究交流による 教材「やまなし」の実践と研究』（国語科教育実践研究会／浅野秀之・常木正則 1995. 3 私家版）に収載した。そこでも、この学習課題は「必要なし」との結論を示した。